

# 季節の花や葉つげや

## 莖てつくるおもちや (1)

瀧田 要吉

倉橋惣三先生から「シーズンにふさわしい路傍の草あそび」に關して一文を求められました。

童畫を描くことが本業である私には、本誌諸先生のように幼児の指導に當つたこともなく、したがつてその教育的立場から云々することはばかられ、實はお引受けしてはみたものゝ、その上に主體が形のものゝを文で説明する齒がゆさで、少々まごつている次第であります。

『草あそび』の主旨としては大體拙著『自然物のおもちや』に書きましたのでこゝでは、草あそびとしておもちやに利用出来る季節の草花で取材になるものを選び、それを種類別に分けてその作り方を大別し、基本的な意味から形態の觀察表現法を便宜上各章に分けて書いてみることに致しました。

花

### (一) 四月頃の 利用できる花と草

(木の花)

うめ、もも、つばき、さくら、かわやなぎ、おしばら

(草の花)

なのはな、ねぎぼうず、つくし、すみれ、れんげ、たんぽぽ、さくらそう、すいせん、その他

葉

(木の葉)

やなぎの葉、つばきの葉、ひばの葉、

かしの葉、藤の葉、松葉

(草の葉)

おおばこ、なづな、こうもり草、よもぎ、クロバ、すかんぼ

莖

三葉の莖、いたどりの莖、たんぽぽの莖、すぎた草の莖、こうもり草の莖、その他

### (二) 種類別と作り方

以上は私が今までにあつかつた四月頃の草花の大體の種類を記しました。地方により又所によつて出る時期にも違いが

ありましよう。よび名も違つてゐることとは思いますが、むづかしい植物學的なことは許して頂くことにして、これらの種類から出来る遊戯上のおもちやを大別してみますと。

### 花のおもちや

うめ(うめの花人形)花を頭に見たてて千代紙を着せる。開いた花はお母さん、つぼみはお父さん。

もも(かんざし)椿の葉など二重に折つて合せめに花をならべ、これを糸でとめて髪えさす。

つばき(花輪、かんざし、人形)花輪は糸を通してつなぐ。かんざしは花の下部を棒を通して髪えとめる。人形はつぼみを掌でもんで花弁をやわらかくしてから下えめぐり、芯を頭に見たて、下ろした辨は身體に見立てる。

さくら(首輪、花輪、花くさり)首輪は散つた花びらを糸に通して首え下げる。花輪は、同じく散つた花びらを松葉を通して輪にする。花くさは、咲いてるまゝを莖の根元からつんで、開いた花え莖の

もとを、またがらせつゝ連鎖してゆく。かわやなぎの花(おだんど)この花は花というより實の感じのすること、うぶ毛のようなやわらかさを愛で、小枝などにさして、まゝごとのおだんどにする。

おばい「黄梅」(繪具)まゝごとの時木の葉などに盛つて、お菓子に見立てるもよく、色素が強いので水や紙などを染めるのに使うのも面白い。

なのはな(おひなさま)十五センチ位の長さに切り、千代紙に包んで、開いた花は女びな、つぼみの花は男びなとする。又葉つばに包んでみづびきでしげれば葉の花びなとして、ひな段に風情をそえる。

ねぎぼうず(おひなさま)莖の上のぼうず玉を頭に見立てる。菜の花びなと同じに開いたものを女びな、つぼみを男びなにして千代紙を着せる。向ぼうず玉は薄い皮をかむつてゐるので、その皮へ目鼻をつけると一そう可愛くなる。

つくし(とんぼ)花莖とも使い、花のふくらんだ部分え、柳の葉四枚を翼とし

てさし込み、目玉をはやぶ、こうじの玉か南天の實などそえると面白い。

すみれ(押花)古くからの遊戯としては首引として、花のくびれ目を兩方からひつかけて引つぱりつこする遊びもあるが、押花として、古はがきなどをクレヨンで塗り、臺紙をつくり、それえ張りつけて紐で吊すようにすると、面白い壁かけになり、自然觀察のたすけともなる。

れんげ(かんむり、花輪)かんむりは花莖とも四五本を使い、花を外側え出し莖を内側え編込んでまるめ頭えかぶる。花輪は花の下部の莖の部分を爪で割つてそれに別の花莖とを通してながら、れんげを連鎖してゆく。

たんぼ(花立)莖をちぎつたらざり口を爪で四つに割り、つばで濡めすと莖は外側えめくれてたまる。この變化だけでも幼児は相當興味をもつが、このめくれを下え置くと足になつて花が立つのである。まゝごとなどにはうつつけのものになる。

さくらそう(お菓子皿)野生のものを使う。葉つばをお皿にして、花はちぎり

お皿に盛る。

すいせん（うで輪、とんぼ）一重の花を使う。莖を幼児の腕を巻いてしげれる程度の長さで切り、四五ヶ所え爪の先で割目をつくり、それえ花をはさんで腕を巻く。尙葉つばの細長くして厚ぼつたいのを利用してやなぎの葉を翼にそえると、とんぼにもなる。

### 葉つばのおもちや

やなぎの葉（とんぼの翼、かたつむり）葉そのものではおもちやにはならぬが、細長い特色を利用して翼に見立て、前述のつくしやすいせんの莖えそえてとんぼにする。かたつむりは葉を横にして、いちようの實を中心えそえるとそのまゝでかたつむりに見える。角には松葉二本そえれば尙よい。

つばきの葉（コツブ、水車の翼）コツブは厚くてやわらかさもあるので三角垂を作り、合せ目を小枝か松葉などで、とめると水がもれない。水車の翼は葉を半分程にちぎり、しの竹などにつけてもよく、にんじんや大根などえ葉元をさし込

み小枝を通して面白い水車が出来る。

ひばの葉（押繪）葉は押しておかなくとも大體が平たい形状をしているので圖書帳などえ糊でとめ、前景え色紙でもクレヨンでもよいから鳥居の形をそえると神社に見える。いちようの葉などそえれば森のある風景が作れる。

かしの葉（草笛）新しく出た若葉を使う。人差指と中指で口えかるく押えて吹くと鳴る。別の方法としてまるめて吹いても鳴る。

藤の葉（しきりっこ）莖ごともしいで葉をこき落したものを幾本も作る。遊戯の方法としては五本なり十本を相手と同數にして掌から地上え投げると、莖と莖で交叉されたしきりが出来る。今度はそのしきりの中え凡そ入りそうなだけ莖を掴んで入れると、入れた數だけ相手から貰える。ルールとしてはこの場合掴んで入れた莖がしきりにふれると無効になる。

松葉 利用範圍の最も廣い葉である。葉つばを主體としては、莖のついでるままでは、すもう、柄をつけて、ほうき、組合せては、薙。鎖。かめの子。虫籠。

さし込んで作れるものでは、かんざし。旗。弓。椅子。人形。使つては、いちよの葉え組ましてつけるちようくのひげ。葉つばえすげて、ぞうりの緒にするなど。

おおばこ（うちわ、三味線、お面）莖を根元から摘み、そのまゝでうちわの形状をしているが、葉元の方え、こうもり草の穂など横えさし込むと面白い。三味線は莖を折つてしづかに引つばると中から莖の芯が三四狀出る適當に引出した所で小枝にむすぶと、三味線の形状になる。お面は葉つばえ爪の先で目口をあけ、先の三味線のやり方で芯もとつて耳えかける紐として、目の兩側えそえれば尙よい。なすな 結實した實の殻が丁度三味線のばちのようなかっこうをしているところからペン／＼草とも云われている。莖からもいで、耳のそばで廻すと可憐な音を出す。

こうもり草（こうもり、ほうき）いたる所の野道にある草で、その穂がこうもりの骨を思わせるところから此名のきたもの。穂を下部えまるめて同じくその穂

の一本を利用して結ぶと、丁度こうもりのようになり、むすびめの所を下ければつぼまり、上げれば開く。ほうきとして三四本を寄せ同じく莖で莖を二ヶ所穂の所一ヶ所むすべよ。

よもぎ（繪具）色素が強いので葉そのものを紙へ塗つてもあざやかな緑色にそまるし、小石などでついで汁をつくり水えまげて色水など作るのも面白い。

クロバー（圖案）全體に大小なく葉の形體がそろつてゐるのを利用して、押葉をつくり圖書帳などに張合せると面白い圖案が出来ゐる。幼児に描かした繪の周圍などにはつてやると頗ぶち的な効果も得られる。

おかんぼ（人形）文字では少々説明がむづかしいと思われるが、莖ごと摘んで二つに折り、その折目を頭の部分にし、莖の二本を足を出して抱き合せるようにし、おおぼこの莖などでしぼる。

莖のおもちや

三葉の莖（筥）三四センチ位に切り太い方を吹口にしてふくと面白い音色が出

る。音の高低は莖の長さ太さによつても違う。

いたどり（水車、花たて、手桶）山村ではいたどりと云われてゐるが里ではすかんぼとも云われてゐる。莖が草にしては太いのと、無害であるため噛じるとほろ苦い味がする。水車の作り方は五センチ位に太めの所を切り爪で割れ目を入れると自然に外側を向つて丸くめくれるので芯え小枝を通して落し水えかけると、めくれた所が翼となつてくる／＼廻る。花たてはこのめくれを片方だけ作るとよいのでこれが立つ役目をするので丁度筒え開いた足をつけたと同じになる。手桶は十センチ位に切り半分位の所から手を取つて小枝をさせばよい。

たんぼの莖（筥）約中心の所え爪で割目を入れ、つばで濕めして吹くと音色が出る。

すぎな草の莖 無数に節のあることゝ一度引抜いて又はめ込んで解らぬところから相手に知れぬように抜いてはめ込みその所を當つこする遊戯。

こうもり草の莖（籠、編もの）莖が細

長くて太さの變つてゐないところから、長いものを選び籠に編む。編みもの。交互に組合せることによつて小さな數物のようなものが作れる。

以上で大體の種類と種類別のかんたんな作り方のことをしるしました。形態の觀察、表現法は次號で述べることに致します。（つゞく）

